

出来成訓先生に捧ぐ

われら神奈川大学三銃士

石井 美樹子

出来成訓先生と松山正男先生そしてわたくし、国立大学で奉職していた三名が神奈川大学に移籍したのは昭和六一年のことでした。中国学科新設に伴い、英語教師の充実をはかるようにとの文部省の指導により、わたくしたちが採用されたのです。当時「英語部会」は存在せず、移籍してから英語英文学科等の会議におよびがかかることはなく、隅っこに肩を寄せ合い縮こまり、いったいわたくしたちの処遇はどうなっているのかと不安を募らせました。その年の暮れ近くになってようやく、水面下で動いていたものの正体が明らかになりました。新任英語教員すべてを、あらたにもうける「英語部会」に所属させ、一般英語の責任部会にしようとの案が具体的な姿をともなって浮上してきたのです。わたしたち新任の英語教員は驚愕しました。赴任して日が浅く、神奈川大学の西も東も分からず、ましてやこれまで神奈川大学でどのような英語教育が行われてきたかについてはまったく無知でこれから学ぼうというときに、いきなりたった数名で神奈川大学の英語教育の責任者になれと言われたのです。総受講者一万六千人余り、非常勤講師六百八十人ほど（わたしの記憶が確かであれば）、それを数名の教員で統括せよというのです。当然わたしたちは異議を唱えました。神奈川大学でこれまで英語

「教育にあたらられてきた先生方のご支援なくしてはまっとうできる重責ではないと。英語英文学科の二十人の教員のうち、十名は一般英語教員として採用されていた事実もあり、英語英文学科に所属するものの、英語英文科に所属する教員が全員で一般英語五十コマを受けもち支援すること、すでに一般英語教員として採用された十名分の人事は、退職に伴い順次「英語部会」に返却するということで泣く泣く了承しました。肝心なことは、英語英文の先生方が退職されたら、英語英文科の教員定数が十人になるまで、その後任人事は「英語部会」にゆだねるという約束でした。この約束の重さを、それが後に何を意味することになるか、歴史が解き明かしてくれることになります。

ともあれ、わたしたちはなにがなにやら分からないまま、泣きの涙で不安のうちに「英語部会」を発足させました。正体不明のマンモスカ巨人を相手に勝ち目のない戦いを開始した気持ちで、大学に行くのが恐ろしく、重い足を引きずりながら大学に向かった日々を鮮やかに覚えていきます。わたし自身は不眠症と目の奥の痛みに数年悩まされました。

わたしたちはまず実態を把握することから始めました。一般英語が行われている授業の調査を行ったのです。一講堂で八百人を越える学生を対象に行われていた英語の授業もいくつかあり、仰天しました。実態調査は、数名で「英語部会」を担うことは不可能であることを大学当局に知ってもらうよい資料となり、新しく教員を数名採用することができました。決裁権を持つ各学部各学科と粘り強く話し合いを続け、いかなる英語授業を展開したらよいか何年も議論しました。やがて、それが実り、少人数・能力別クラス編成という信じられないような大改革を行うことができました。改革の中心には、いつも松山・出来両先生がおられました。精神的に

も肉体的にもへとへとになった三人はしばしば白樂の飲食店にしげこみ、互いに愚痴をこぼしたのですが、あるときわたしが「わたしたちはまるで三銃士みたいですね」といったら、出来先生がすかさず「強ければいいですね」と答えられたのを覚えています。

二年後、英語英文学科はカリキュラムを大幅に改革し、五十コマの約束を堅持できなくなり、以後、年ごとに英語英文科の一般英語に占める責任コマ数が減ってゆきました。十名分の専任人事の返却は完成しませんでした。二〇〇六年までに、九名分の返却が完了しました。二五年近くかけて、約束がほぼ果たされたわけですが、その間、「英語部会」は新人を採用し続けて今日にいたり、優れた若手研究者を揃えることができました。アメリカ、カナダ、イギリス、オーストリアなどで学んだ若手研究者を採用してきたことが、国際交流学科の新設にもないカリキュラムを編成するときにおおいに役立ちました。この間、出来先生とわたしは英語英文学専攻の大学院の設立に深く関わりました。研究科の設立によって、英語英文科と一般英語の垣根が低くなり、そうごう乗り入れができるようになればというのがわたしたち二人の願いでした。二年前ほどから、われわれの仲間の多くが英文科の授業を受け持ち、専門分野を活かした授業を展開しております。

まことにひ弱な三銃士ではありましたが、同志のお二人は夢の完成を目にして退職され、わたしひとりが残されました。さらにひ弱になった孤独の一銃士に何ができるでしょうか。残された日々、両先生の学恩を忘れず、ひとりであることを成し、愛する神奈川大学を去りたいと願っています。